

2024年11月24日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教16「水をください」

イザヤ41：17～20、ヨハネ4：1～8

今日から読みますサマリアの女性の物語は、イエスさまとの出会いの物語です。その出会いはいかにして起こるのでしょうか。4節「しかし、サマリアを通らねばならなかった」ここには強い必然があります。地理的にもユダヤからガリラヤへ行く最短のルートとしてはサマリアを通るのがもっとも自然でありました。そうでなければ迂回していくしかない。でもこの「ねばならない」にはもっと別の理由があります。実はサマリアを通ることを妨げる要因がありました。9節に「ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである」とあります。ユダヤとサマリアは旧約の時代からそういう対立関係にありました。

けれども、そのような人間の対立を超える神さまの必然があります。考えてみれば、わたしたち人間も神さまと敵対関係にありました。それが罪の状態です。アダムとエバ以来、人間は神さまに背き続けてきました。神さまは、その状態を良しとはなさいません。この罪からわたしたちを救うために、わたしたちのところを通らねばならない。この世に来なければならぬ。それが、まことの神さまがまことの人となられる、神さまの独り子イエスさまを世にお遣わしになられる、クリスマスの出来事に他なりません。そこには神さまの必然があります。それは対立を超えて、そのような罪の中にあるわたしたちを捨て置かれない神さまの恵みのご意志の表れであります。

イエスさまは、サマリアのシカルという町に来られました。6節に「旅に疲れて」とあります。季節がいつなのかはわかりませんが、仮に夏だとすれば、正午の太陽が高い位置にある時間帯は炎天下の一番暑い頃だと思います。イエスさまは旅の疲れと、喉の渇きを覚えられ、井戸端に座っておられました。ちょうど、そこへ一人の女性が水を汲みにやってきました。そこでイエスさまは彼女に言われます。「水を飲ませてください」

何気ないやりとりのように思われますが、気になる点が幾つもあります。まず女性が水を汲みに来た時間帯です。「正午ごろ」とあります。通常この時間に水を汲むことはありません。その水はいわゆる生活用水です。一日の生活に必要な水は朝汲みに来るのです。その方が涼しいですし、理にかなっています。けれども正午ごろの一番暑い時に汲みに来なければならないのは、それなりの理由があるということでしょう。それは明らかに人目を避けているということです。それはこの後のところを読んでいきますと分かりますが、この女性の抱えている事情と関係があるようです。18節に「あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない」とあります。これはどういうことでしょうか。詳しい理由は分かりませんが、見方によっては五回も結婚に失敗して、しかも今は夫ではない男性と暮らしている。皆さんの周りにもそういう人がいたらどうでしょうか。何か問題があると感じて、関わりを避けるかもしれません、本人も人目を避けて生活していたかもしれませんが、同時にその共同体からも疎外されていた。爪弾きにされていた。そのような孤独の中に置かれた一人の女性にイエスさまは声をかけられます。

さて、ここからはイエスさまのことですが、まず何より「旅に疲れて」ということが気になります。また水を欲しがっていることから喉の渇きを覚えておられるということ。疲れや渇きは、

人間の身体的な感覚です。もちろん移動は徒歩ですから、炎天下の旅は過酷なものがあると思います。当然、疲れますし喉も渇きます。また不思議なのは、「水を飲ませてください」と女性に頼むわけですが、どうして井戸端にいるのに自分で水を汲んで飲まなかったのかという疑問があります。11節を見ますと「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし」とあります。わたしたちは井戸というと、その場所につるべのようなものが設置してあることを想像しますが、どうもそうではない。水をくむ物を持参していかないと水が飲めないのです。イエスさまはそれをお持ちでなかった。加えて弟子たちも買い物に行ってしまうと、ただお一人そこに取り残されたような状況だったのです。それゆえに女性に「水を飲ませてください」と頼むほかありませんでした。そのように自分で渇きを癒す術を持たない、何も持たない、一人では何もできない弱さがあります。

ヨハネ福音書は、イエスさまがまことの神さまであられることを強調する一つの大きな特徴があります。「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示された」(1:18) イエスさまが神さまを示された、神さまの本質を表されたと言う。けれども、その福音書が、同時にイエスさまが疲れを覚えられ、喉の渇きを覚えられ、さらには水が飲みたくても一人ではどうすることもできず、誰かに助けを求めなければならない。それはわたしたちとまったく同じ人間そのものです。そういう一人の弱さを抱えた人間のありのままのお姿がここにあります。イエスさまはまことの神さまでありながらも、どこまでもわたしたちと同じところにお立ちになられた。わたしたちの疲れや渇き、その痛みを知ってくださるのです。

そのまことの人間としての歩みが向かっている先に十字架があります。今日のところでイエスさまは「水を飲ませてください」と渇きを覚えておられます。その渇きの極みがああ十字架にありました。イエスさまが十字架の上でいよいよ最後の時を迎える、その時に「渇く」(19:28)とおっしゃった。イエスさまの渇きは、十字架の渇きにつながっています。それはわたしたちが経験する渇きの極み、それは単に喉が渇くという肉体の渇きだけではない。それ以上に魂の渇き、罪ゆえに神さまから離れている命そのものの渇きです。それはこのサマリアの女性が抱えている渇き、わたしたち一人一人の抱えている魂の渇きと決して無関係ではありません。五回の結婚を繰り返し、それでも満たされない渇きがある。その渇きを癒すために、イエスさまご自身がその命をささげられた。その命を注ぎ尽くして、ご自身が渇かれたのです。

来週からアドヴェントに入ります。まことの神さまがまことの人となられて、わたしたちのすべての疲れ、渇きをご自身が引き受けてくださいました。それだけではありません。十字架でその命を注ぎ尽くして、わたしたちの疲れ、渇きを癒してくださいました。その溢れるばかりの神さまの恵みをいただいていることを心に留めながらクリスマスに備えましょう。

天の父よ。あなたはわたしたちの疲れ、渇きをご存知であられます。そのために独り子をお遣わしになられ、まことの人として、わたしたちと同じ苦しみを負ってくださいました。そして十字架でその命を注ぎ尽くして、わたしたちの魂の渇きを癒してくださいます。その幸いを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。